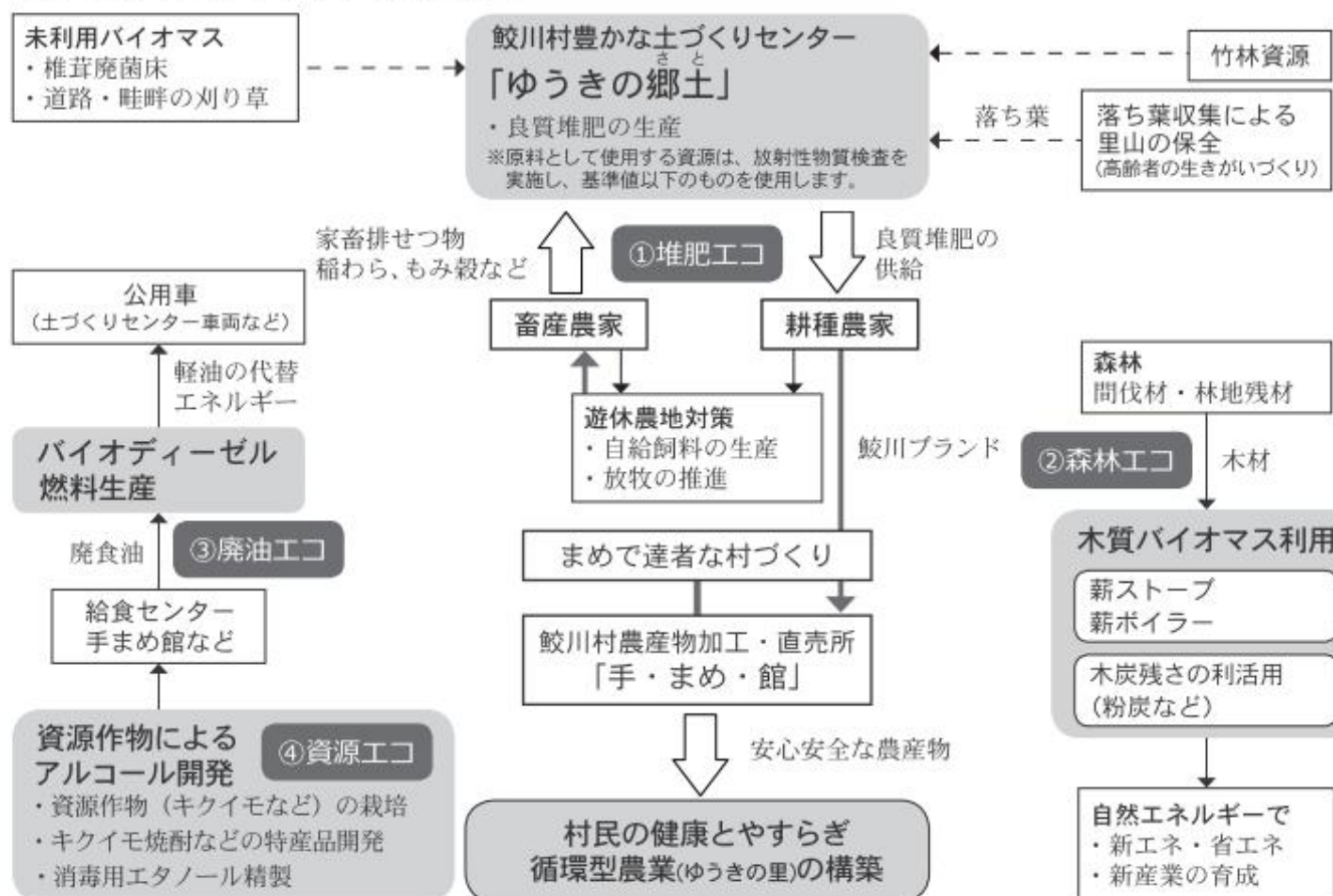


## 「特集」鮫川村バイオマスヴィレッジ構想

# 子どもたちへの贈り物 豊かな資源を 生かした美しい村

「鮫川村豊かな土づくりセンター」が二月二十八日、本格的に運転を開始しました。  
施設の愛称は、舟木久さん（岡田）が応募した「ゆうきの郷土」に決定。  
今月号では、農産物とエネルギーの自給自足を目指した「鮫川村バイオマスヴィレッジ構想」について紹介するとともに、土づくりセンターが果たす役割をお知らせします。

## ■村バイオマスヴィレッジ構想関連図



## 私たちの暮らしを豊かにする 「バイオマスヴィレッジ構想」

### 資源循環型社会を 目指して

現在、鮫川村は第三次振興計画に基づき「まめな暮らし」が育む環境を生かしたやすらぎとふれあいの村づくり」を基本理念として村の基幹産業である農業の六次産業化を図るため、「まめで達者な村づくり事業」「ゆうきの里づくり事業」を推進しています。そのような取り組みの中、

鮫川村そのものをブランド化し自立する元気な村づくりを進めるため、平成二十年九月に「鮫川村バイオマスヴィレッジ構想」を公表しました。バイオマス資源を活用した村内完結型の資源循環型社会を構築し、将来にわたって美しい鮫川村をのこしていくことを目指しています。そのため、具体的な取り組みとして、主に四つのバイオマスの利活用があります。

### 1 畜産堆肥などを 生かした土づくり

村内に豊富に存在する家畜の排せつ物や落ち葉、もみ殻などを利用し、良質な堆肥を生産します。また、この堆肥

を使い農業や化学肥料を減らした安心安全な農産物を生産します。さらに、製品化した堆肥は村農産物加工・直売所「手・まめ・館」で販売することを検討しており、農家だけでなく一般家庭での家庭菜園やガーデニングなど、幅広い利用を期待しています。

村では、使用するバイオマス資源および製品化した堆肥に対して放射性物質検査を実施します。

現在、家畜の排せつ物については、ほとんどのものが放射性物質不検出という結果になっています。これは、酪農家では与えるエサに対して果酪農業協同組合が放射性物質不検出のもの以外与えてはいけないという基準を設けているほか、村独自に和牛農家に対して行っている輸入乾草飼料の配布、放牧の規制などの

### ● バイオマス

自然界の営みの中で発生する再生可能な資源の総称。身近に存在するバイオマスとして、家畜の排せつ物や生ごみ、稲わら、もみ殻、落ち葉、廃食油などがあります。



大楽勝弘 村長

## 村を支える産業と 美しい農村景観、 村民の健康を守るため

**村**長に就任した当時、遊休農地が目立っていました。農作物を作れば作るほど、農家が赤字を抱えている状況でした。そこで、農家の人に少しでも元気になってもらおうと始まったのが「まめで達者な村づくり」。これを続けているうちに、村外から足を運んでくれる人が増えました。その1つの要因は、遊休農地が減少したことにより、農家自らが「鮫川村が少しずつきれいになった」という意識を持ち始めたことです。農村景観というのは、田んぼ、畑が整然と耕されていることなのです。この里山景観を守るために、もう1歩前に出ようとしたのが「ゆうきの里づくり」です。

また、昔は5から10頭の畜産農家がほとんどで、どこの家でも複合型農業を営んでいました。しかし、今では大規模経営でないと成り立たない状況で、昔ならば自家消費できていた堆肥も現在のような多頭化飼育では処理しきれません。この産業廃棄物となってしまう堆肥を有価物に変えようというのが「バイオマスヴィレッジ構想」です。村の畜産を守る上でも重要な事業です。

ものづくりは土づくり。いい作物を作るためには、いい土を作らなければいけません。いい土とは、良質な堆肥がたくさん使われている土。それを使うことで、化学肥料や農薬を抑えて作物を作ることができます。そして、健康にいい安心安全な農作物を食べることができます。農薬にはガンの誘発物質、化学肥料には硝酸態窒素が多く含まれています。いずれにしても、それらが含まれた作物を摂り続けることで内臓に蓄積し、ガンを誘発する原因となる恐れがあります。

問題なのは、作った安心安全な野菜をどのように売るのがかです。これが今後の課題になります。村全体で取り組み、消費者にしっかりとアピールしていく必要があります。そのために、都市と交流することで村や商品を理解してもらうことが大切だと考えます。

農業はとても重要な産業。食べ物を生産し、健康と命を支えている産業なのです。農家の皆さんが農業に誇りを持ち、農業で自立できるような村づくりをしていきたいと考えています。



1

## 村内の豊富な資源を生かして エネルギーと農産物を自給自足

取り組みによるものです。また、製品化した堆肥については、農林水産省が設ける基準により、一キログラム当たりの放射性物質が四〇〇ベクレル以下のものが流通します。

村にある資源を利用し、農業の基本である「土づくり」を実践。そして、安心安全な農産物を生産、販売することが、それを消費する村民の健康増進につながります。また、村内産の堆肥を使った農産物をブランド化することで市場価値を高め農家の所得向上を

図ります。

### 2 間伐材などの 木質バイオマス

森林エネルギーを有効活用することで化石燃料を減らし、地球温暖化防止に寄与することを目指しています。

村内の間伐材や林地残材を集め、薪として利用。村民保養施設「さざり荘」の薪ボイラーの熱源とし、主に温泉の昇温や給湯、床暖房に活用しています。

今後、村内森林から出た間

1 2月28日に開所式を行った「鮫川村豊かな土づくりセンター・ゆうきの郷土」/2 廃食油からバイオディーゼル燃料を作る精製機/3 間伐材を利用している「さざり荘」の新ボイラー

### 3 廃食油から BDFを精製

伐材などを村が買い取り、加工、販売していくことを検討しています。これにより、個人林家の所得を確保するとともに森林の保全に結びつくことが期待されます。

平成二十二年から取り組みが始まっています。村内の家庭や食堂などから出る廃食油を収集し、バイオディーゼル燃料（BDF）に精製。この燃料は学校給食配送車に利用されています。

### 4 資源作物による アルコール開発

増加している耕作放棄地などの解消を図るとともに、新たな村の特産品を開発することと、さらなる村の活性化を目的としています。

資源作物となるキクイモは、東京農業大学によりさまざまな実地検証が行われ、本村に適していることが分りました。

た。これまでに、「キクイモ焼酎」が製品化され販売されています。

### 自然環境を守り 誇りを持てる村に

この構想では、村内の豊富な資源を生かしエネルギーと農産物の自給自足を目指しています。農村は、農業の営みによって守られます。村全体が人と自然にやさしい農業に取り組みことで、自然環境を守り、村民が村に誇りを持つて安心して生活できる村づく

## 土づくりセンター稼働で 循環型社会へ一歩前進

バイオマスヴィレッジ構想の核となるのが、先に述べた畜産堆肥などを利用した土づくりです。これを担う施設として、バイオマス変換施設「鮫川村豊かな土づくりセンター・ゆうきの郷土」が二月二十八日に運用を開始しました。

平成十八年から検討を繰り返し、平成二十二年に着工。東日本大震災および原子力発電所の事故により工事が一時中断しましたが、このほど開

所を迎えました。

本構想の総事業費は約四億円。そのうち、約三億円が土づくりセンターに関わる事業費となっています。財源は国県の補助金を活用しており、村一般財源からは総事業費の約一五パーセントとなる六千万円を支出しました。

この施設が、将来にわたり村の農業振興のシンボルとして親しまれ、本村農業の振興と循環型社会の形成を担う施設となることを期待します。

5

4

# 土づくりセンターに 寄せる期待

土づくりセンターに関わる  
畜産農家、耕種農家、そして消費者である村民の皆さん。  
それぞれの立場から見る土づくりセンターと  
そこに寄せる期待について、4組の方々に話を伺いました。  
あなたにとって、土づくりセンターはどんな施設ですか。



有限会社関根ファーム  
関根 靖さん せきねやすし／土路部

VOICE  
01  
畜産

## 家畜排せつ物処理の 手間省いて規模拡大を検討

内二番目の牛乳出荷量を誇る有限会社関根ファーム(西山字土路部)。代表を務めるのは関根靖さん。現在、関根ファームでは約二六〇頭の乳牛を飼育しており、一日当たり約四四〇〇リットルの牛乳を出荷しています。靖さんは土づくりセンターに大きな期待を寄せています。「今の畜産は規模を拡大していかないと経営が成り立たないという状況です。しかし、

頭数が増えれば排せつ物も増え、その処理にまで労力を費やさなければいけません。土づくりセンターが稼働することで、その手間が少しでも減ることはとても助かります」関根ファームでは、一日当たりダンブ二台分以上の排せつ物が出ます。これを堆肥舎に運び切り返し作業を行い、デントコーン畑の肥料として活用しています。しかし、排せつ物が堆肥舎いっぱいにな



早朝から夕方まで牛舎で乳牛の世話をします

水野洋子さん  
みずのようこ／広畑



## 私

たちのような農業をやっている人も土づくりセンターで作った堆肥を利用できるならうれしいですね。化学肥料は悪いといわれても肥料がないと作物はできないので使わざるを得ませんでした。しかし、それを使わずに地元のもので作った堆肥を利用できることは最高です。昨年はゴーヤを栽培して佃煮を作りました。今年はゴーヤのほかにピーマンも栽培したいと思っていますので、ぜひ使いた

たいと思います。

また、若い人たちの農業離れが問題になっていますが、基礎となる土づくりを村がまとめてやることで農業を始める人が増えてほしいです。子育てや仕事が忙しい中、一から全部やることは大変だと思います。しかし、土づくりの手間が減ることで、休日などに農業をやることも可能になるのではないのでしょうか。農業をなくさないためにも、そうなるってほしいと思います。

## 農家だけじゃない 村民と村にとっての効果

VOICE  
02  
消費者



武藤仁子さん  
むとうじんこ／内ヶ電

村内外にアピールしてほしいです。そして、さらに生き生きとした村になって、子ども

たちが「鯉川村に居たい」と自信を持てるような村になってほしいと思います。

子どもが食べることでも考へると、新鮮で安心して食べられる物を購入したいです。「手まめ館」に売っている物は安くて新鮮で、とても助かっています。土づくり

センターができることで、農薬や化学肥料を減らしたより安心安全な野菜を「手まめ館」で買えるようになるならば、さらに利用したいですね。また、この取り組みを広く



矢吹廣信さん・テル子さん  
やぶきひろのぶ・てるこ／横座

VOICE  
03  
農家

## 村内産の良質堆肥で 農家の意識変化を期待

十九年前からビニールハウス栽培を行い、有機栽培に十年前から取り組んでいる矢吹廣信さん・テル子さん夫妻。約二〇アールのビニールハウスでトマトやホウレンソウ、ネギを栽培し「手まめ館」などに出荷しているほか、自家消費用として大根やニンジンなど十数種類の農作物を栽培しています。無農薬で栽培しているホウレンソウは「甘い」と好評です。

「農業は土づくり。土台となる『土』をしっかり作らないと作物はできない」と話す矢吹さんのビニールハウスでは、ホウレンソウの収穫が終わった四月初めに堆肥を入れて土を耕します。堆肥のほかに、米ぬかや石灰をふり、農薬を使うことはほとんどありません。使う堆肥についても、雨に二、三回あてて中の塩分を流し出します。なるべく塩分をビニールハウスの中に入



自家栽培した野菜を使ったテル子さんの手料理(ネギ汁もち、カブの酢漬け、ホウレンソウのお浸し)

れないように心がけています。「土づくりセンターが稼働して堆肥が完成すれば、ぜひ利用したいと考えています。この取り組みで、いい土づくりができることによって、村内の農家全体の意識や意欲も変わってくるのではないかと思います」